

游相日記

わたなべ・かざん

作者: 渡辺崋山(1793-1841)

成立: 天保2年(1831)



解題

Keyword

- 稀書複製会
- 佐藤一斎
- 高野長英
- 蛮社の獄
- 三宅友信
- 高木梧庵
- 大山道
- 厚木

画家・思想家として名高い渡辺崋山による相模小旅行の絵入り紀行文。

■ 成立と諸本

『游相日記』原本は天保2年(1831)旅行中に作られた渡辺崋山の自筆本だった

とみられる。この本は個人蔵となって大正時代まで伝存していたが、大正12年(1923)の関東大震災で焼失したという。しかし、この少し前の大正7年、当時古典籍の精巧な複製本を300部限定で制作していた稀書複製会により原本の複製が刊行されており、これがその後の影印・翻刻の底本となっている。

■ 作者

渡辺崋山は寛政5年(1793)三河国の小藩・田原藩家臣の長男として江戸に生れる。通称、登。家が貧しく内職のために絵を学び、画才を発揮して20歳代で一流画家と認められる。学問は佐藤一斎らを師として儒学を修めたが、天保3年(1832)江戸詰年寄役に就いたころから高野長英らと蘭学を研究し、海外事情に通じる。藩政改革に実績を上げつつ、幕府の鎖国政策に批判的意見を強めた。しかし天保10年、幕府により長英らとともに投獄(蛮社の獄)され、国元・田原で蟄居(ちつきよ)の身となり、同12年その地で自刃した。享年49歳。



(影印本)『游相日記』
下鶴間で泊まった「まんじゅう屋」

内容

素描20点を含めて全68丁。旅の主たる目的は藩主・三宅氏の家譜編纂の調査で、特に崋山が近侍していた三宅友信の生母(11代藩主康友の側室)お銀様のその後の消息を、実家のある相州にたずねることだった。天保2年9月20日、弟子・高木梧庵を伴い江戸を立つ。崋山らは大山道を西へ進み、荏田(横浜市青葉区)と下鶴間(大和市)に泊まり、22日小園村(綾瀬市)で、今は貧しい農家の主婦であるお銀様と25年ぶりに感動の再会を果たす。その後、厚木宿に2泊し、24日の厚木出発で紀行は終わる。崋山は宿で地元の人々と酒宴に興じ、絵や俳句を作って与えるなど楽しみながら、一方で農業事情、厚木の繁栄、下野烏山藩の苛政、相模川の水運と水害等を為政者の目で見ている。また、画家の目で相模の自然や風物、人物をこまやかに記録した心あたたまる紀行である。



史料本文を読む

<複製本・影印本>

- *『游相日記』稀書複製会編 米山堂 1918
- ◆「游相日記」(『新編稀書複製会叢書』第44巻 臨川書店 1991 [918.5/32/44])
- ◆「游相日記」(『渡辺崋山集 第5巻 影印(上)』日本図書センター 1999 [081.5/102/5])

<翻刻本>

- ◆「游相日記」(『崋山全集』第2巻 崋山会 1915 [721.7/14/2])
- ◆「游相日記」(『日本庶民生活史料集成』第3巻 三一書房 1969 [380.8/8/3])
- ◆「游相日記」(『渡辺崋山集 第1巻 日記・紀行(上)』日本図書センター 1999 [081.5/102/1])

<注釈本>

- 『平成校注「游相日記」』涌田佑著 相模経済新聞社 2004 [K99.92/20]
※「本文」「詳注」「現代語訳」で構成



史料についてさらに知る－参考文献－

- 『厚木と游相日記』高瀬慎吾著 平塚信用金庫厚木支店 1965 [K99.92/1]
- 『大山道今昔：渡辺崋山の「游相日記」から』金子勤著 神奈川新聞社 1985 (かなしんブックス3) [K68/174]
- 『渡辺崋山：優しい旅びと』芳賀徹著 朝日新聞社 1986 (朝日選書296) [K99.92/5]